

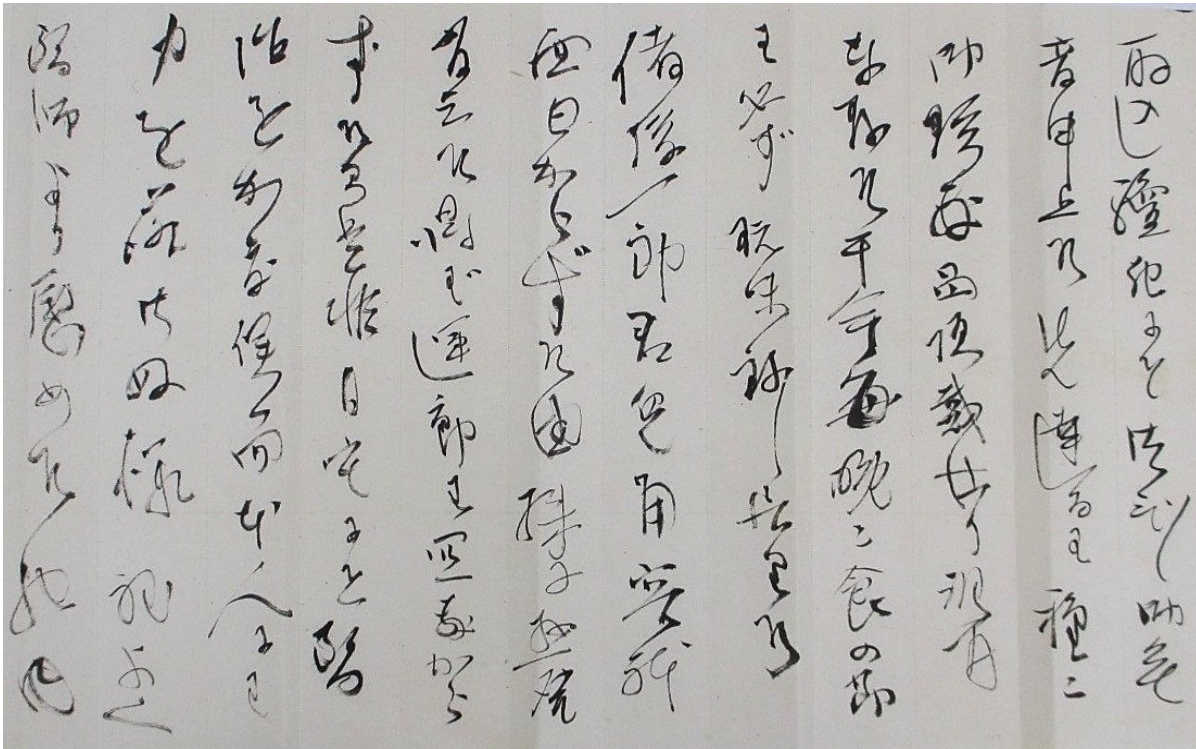
③⑧〔萩原密蔵書状〕

大正2 (1913) 年5月29日

これは、萩原密蔵が義父八木始に宛てた書簡です。病状が思わしくない始長男の俊一郎のため、熱があれば運動はよろしくないなど、医師の立場からの助言が各所に見られます。また、過日に萩原朔太郎ほか大勢が見舞いに行くなど、両家の親密な様子がうかがえます。しかし俊一郎は、薬石効なく翌6月に病没しています。

八木俊一郎は、明治3 (1870) 年前橋石川小路の屋敷で生まれ、前橋第三十九銀行に入行し、明治30 (1897) 年同行東京支社に勤務していました。

八木健次家文書 P09702 No.1481



【史料③⑧】〔萩原密蔵書状〕(大正二年)

取込続きにと、つひつひ御無

音申上候、先達せんだつて而は種々

御珍敷品頂戴仕り難めずらしきしな有ありがたく

奉ぞんじたまつり存候、于今毎晩二食の節

は必ず玩味致し居り候、

偕俊一郎君、兎角とかく容体

面白からず候由、殊とくにに熱発

有之候得ば、運動は宜敷よろしから

ず候間、是非自宅にと医

治くわえたくせうろうてを加度候而、本人にわ(は)

力を落さぬ様程よく

医師より慰め候様、内

〆印取み候事之之何
 〆の治療方法の一は
 子場言より小生義也
 又都合次第御遠
 慮なく御申越し被
 下度候、例の痰ハキ又は半
 けち等の消毒には充
 分御注意有之度候、又々
 申上候事義有之と考へ候
 得共、余り御無沙汰に打
 過ぎ候為、一に御挨拶迄、
 却 過日は朔太郎始大勢
 罷出、御厄介に相成、難
 有奉存候、殊に御病中
 御取込之御中、厚顔敷
 押懸け候段、誠に恐入
 候、先は一卜語申上度
 迄、早々頓首
 八木御父上様
 密蔵

〆印取み候事之之何
 〆の治療方法の一は
 子場言より小生義也
 又都合次第御遠
 慮なく御申越し被
 下度候、例の痰ハキ又は半
 けち等の消毒には充
 分御注意有之度候、又々
 申上候事義有之と考へ候
 得共、余り御無沙汰に打
 過ぎ候為、一に御挨拶迄、
 却 過日は朔太郎始大勢
 罷出、御厄介に相成、難
 有奉存候、殊に御病中
 御取込之御中、厚顔敷
 押懸け候段、誠に恐入
 候、先は一卜語申上度
 迄、早々頓首
 八木御父上様
 密蔵

八木御父上様
 密蔵